

日独語の文体・スタイルに関する対照研究

研究課題は、語彙・文法・意味ならびにことばの具体的使用法を観察・記述することで、日独両語の文体・スタイルを比較対照し、両言語ならびにその文化の特性を明らかにすること、もって対照言語学や言語類型論に何らかの貢献をすることを旨とするものであった。言語能力の中でも、「文体能力」は「コミュニケーション能力」と並んで、高次レベルに位置し、言語使用の適格性を司どる。文体はすぐれて「言語的」問題ではあるが、美術、建築などの「様式」としても具現化される。その意味では、さまざまな記号を視野に入れることが必要となる研究分野である。オペラやコンサートホール、美術館、劇場などに事欠かない「文化都市」ウィーンはこの点に鑑みても理想の滞在地の一つであると考えた。

ウィーンに到着したその日のうちに、滞在先の研究機関として受け入れていただいたウィーン大学応用言語学科を訪ねた。まずは、直接の受け入れ教員である J. Spitzmüller 教授の案内のもと、学科のスタッフへの紹介、学科施設の案内などがなされた。幸いにも、研究用のデスクが与えられ、また、ほどなくして図書館の利用カードも発行され、研究は本格的に始動した。基本的には滞在先自宅からほぼ毎日大学に通い（時には自宅で）、新しい刊行物、多少古くても研究課題に関係のある図書類のリストアップを行い、また、在庫のものは適宜借り出して参照した。関連テーマで重要と思われる部門（社会言語学、文体論など）の書誌文献、また、pdf.化された資料についてもその基本データを集めた。この狭義の研究活動と並んで次第にルーチン化していったのは広義の研究活動としての新聞(*heute*, *oe24* など、徐々に *Die Presse*, *Kurier*, *Der Standard*, *Der Falter* などの他紙にも親しんだ)の閲読と、その記事内容を研究メモとしてマイクロソフトワードに記入し、コメントするという作業である。そのメモは滞在の終わりごろには、A4 版で約 750 ページにも及んだ。この活動に携わった背景としては、オーストリアにおけるドイツ語の諸相を正しく理解するには、ことばのみならず、事柄の理解、いわばオーストリア学的な政治・社会、またその歴史に関わる諸事の基礎知識を得ることが不可欠であることに気づいたことが挙げられる。言語に特化した局面に言及するならば、この作業の中で、オーストリア（やウィーン）に特有の語彙(*heuer* [ドイツでは *dieses Jahr*], *Anrainer* [同じく *Anwohner*], *Öffis* [同じく *öffentliche Verkehrsmittel* など])としばしば遭遇し、言語的にもオーストリアドイツ語という言語変種にふれ、また親しむよい機会となった。ウィーン大学ではさらに機会をとらえて、Spitzmüller 教授の授業（講義、演習）を聴講し、適宜専門的な質問やコメントを行った。さらに、J. Hassemer 博士の演習にはかなり集中的に顔を出し、ここでも社会言語学、文体論、日独語対照言語学的視点に根差しながら専門討議に参加することができた。この経験は今後の「教育面」との兼ね合いにおいては、ウィーン大学授業担当者の資料のまとめ方、提示の仕方、またディスカッションの捌き方の「よい」サンプル

ルを知り、参考にする機会として貴重なものとなった。また、とくに演習においては、参加学生（大学院生、学部生）が積極的に発言し、討議に参加するという「討議の文化」の実状を目の当たりにし、あまりドイツのそれと変わらないこと、また、日本の教室における「沈黙の支配」と好対照をなすことを居ながらにして知り、言論の文化についての比較対照を行うことに（あらためて）興味をそそられた。なお、音響美学という出張者にはやや疎遠な分野に携わる S.Reiterer 教授との対話も有益であった。

研究メモの作成、授業への参加を「本丸」とすれば、それ以外の形でも研究を進めた。具体的には、大学イベントへの参加と研究会参加である。前者については、12月初めに図書館で、„Österreichisches Deutsch（オーストリアのドイツ語“という新刊書を紹介する、著者たちによるイベントが挙げられる。その場では、プレゼンや質疑応答を通して、オーストリア人の「オーストリアドイツ語」への愛・愛着の深さを改めて感じる事ができた。これは、いわゆる「言語イデオロギー(Sprachideologie)」の視座から見た、特定の言語（変種）への向き合い方、その評価の仕方の事例としても興味深いものであった。また後者について、ウィーン経済大学で開催された「多言語性研究会」の例会に参加し、メディアにおけるコミュニケーションについての専門討議に参加。自らもいくつかのコメントや質問により研究会を活性化することができた。なお、ウィーン大学の応用言語学科では、規則的に主として「博士論文執筆中・構想中」の学生によるプレゼンの機会があったのだが、これに3回に渡り出席し、ほぼ全ての発表に対して臆せず積極的にコメントや質問を行った。「ポライトネス」「テキストデザイン」など、そのテーマは多岐にわたるものであった。

つねに一つの研究機関に止まり研究を推進することは心地よく、また成果もあがる一方で、時としてそれがルーチン化してしまい、息切れがしたり、発想が枯渇することにもなりかねない。このリスクを回避するため、滞在期間中二度にわたりドイツ連邦共和国に研究出張し、言語学者と意見交換する機会を得た。11月から12月にかけては、アウクスブルク大学に滞在中の慶応大学田中慎教授と近年のドイツ言語学の動向について意見と情報を交換した。また、アウクスブルク大学の H.-J. Heringer 教授とは、コーパス言語学、慣用句、文体論について集中的に討議を行い、近いうちに何か論文を共同執筆する可能性までを検討することができた。訪問後もメールによる意見交換を継続している。ミュンヘン大学の L. Bülow 教授は、以前ウィーン大学にも勤めており、オーストリアの方言にも詳しい。また、オーストリアを含む南ドイツ語圏の方言・地域語のデータベースを作り、それをもとに精力的に研究を進めている。この「若い世代」の学者との対話は、今後の研究を進める上で大いに刺激となった。2月には、デュースブルク大学の G. Herchert 教授（歴史学、中世研究）と境界横断的な対話をするとともに、教授の主催する zoom でのゼミに特別参加し、ドイツ人学生たちとの議論に参加する機会を得た。ミュンスター大学では、E. Franz 博士と「コミュニケーション・トレーニング」について意見交換をし、この部門と

語用論、やりとりの言語学との間の「距離」や「相関関係」を測定することができた。また、「言語的アイデンティティ」研究の専門家である K. König 教授とは、談話の言語学内での「アイデンティティ」の多面性について意見交換をするとともに、近未来のドイツ言語学のあるべき・ありうる姿を思い描く機会を得た。ドイツの首都ベルリンでは、フンボルト大学で「キーツドイツ語」の専門家である H. Wiese 教授を訪ね、先方にまず最近の研究の様子を聞いたところ、狭義の「キーツドイツ語」を離れて、言語横断的に、例えば、英語などの他言語も視野に入れながら、「都市空間の言語の変容」についてプロジェクトを進めていることを知り、自身の今後の研究における視野拡大への指針を得ることができた。ベルリン自由大学では、早稲田大学教授生駒美喜教授などが主催する「言語学ワークショップ」に参加。ドイツ語の心態詞と音調の関係などについての専門討議に参加するとともに、「話しことば学」や「歴史言語学」などを専門とする H. Simon 教授など数名の学者と面識を得ることができた。フンボルト大学の足立ラーベ加代教授、ベルリン自由大学の K. van Eikels 博士との対話においては、映画学、演劇学など、狭義の言語学から見ると「応用的」とも呼べる学術部門の枠内で行われただけに、新鮮な視点がいくつか提供された。

滞在期間中ウィーン市内でさらに、ヴィースバーデンに本部のある「ドイツ語協会(Gesellschaft für deutsche Sprache)」のウィーン支部例会に参加し、本部の中心人物である L. Kuntzsch 博士などと近況報告を兼ねた情報・意見交換を行った。また、チューリヒ大学の N. Bubenhofer 教授ともドイツ言語学やコーパス言語学の近年の展開、AI を視野に収めた近未来の展望について議論した。

在外研究中に刊行した出版物は残念ながらなかったのだが、先述のように研究メモを大量に書き溜めたこと、また、多くの研究者と交流したことは、必ずや今後の研究の中で結晶化することと思われる。その一例として、日本独文学会の 2026 年 5 月に開催される研究発表会に「近年の言語学におけるパラダイムシフトから何が言えるか」という題目でブース発表をする申請を行い、採択された。この発表は、言語学をいわばメタレベルから俯瞰し、その変動の中に見られる「原理」を抽出し、人文学や歴史学を視野に収めた今後の議論にも活かそうとするもので、在外研究の研究課題の「文体論」と関連しつつも、その枠を超える領域を見据えた内容となる。今後の「教育（へ）の効果」としては、以下のことが見込まれる。ウィーンに滞在したことにより、この街の言語的日常生活を居ながらにして観察できたことはたいへん大きな経験となった。それは、どちらかといえば共通語の色が濃い「北ドイツ」寄りであった自らの「ドイツ語」観を相対化して、ある意味客観的に眺め評価するきっかけを与えてくれた。ウィーン、オーストリアの歴史文化について今回蓄積した基礎知識と関連づけながら、「言語の多様性・多層性」について、刊行物や学会発表の枠組みにとらわれず、明治大学の講義、演習、ドイツ語授業などの場で、その成果をふんだんに還元していきたい。